

# よか ネット

YOKANET

NO. 20 1996. 3

(株)九州地域計画研究所



谷あいの斜面全体にレンガ造りの煙突が立ち並んだ、窯場であり店でもある生きている博物館、うろうろ歩きまわりながら楽しく学べるし、買い物もできる。(本文14頁)

## も く じ

### 〈NETWORK・ネットワーク〉

2. 田舎暮らし希望者の受け入れで、多くのファンを次世代まで定着させられるか  
——「田舎暮らしフォーラム」に参加して思ったこと——
5. 地域計画のための一知半解辞典① 若者定着数・率＝地域づくりの最重要課題である  
“継続性”を図る指標
8. グリーン・ツーリズムを考える —— 地域ゼミから ——
9. 大はやりで、積立金もできている「リフレッシュパークゆむら」  
—— 自然と資源を活かしたまちづくり ——

### 〈見・聞・食〉

10. もう少し優しさが欲しかった歩道橋 —— 横断歩道まで無くしてしまったのに ——
11. 歴史が埋もれていたまちと、受継いできたまち —— 岐阜県大和町、郡上八幡 ——

### 〈近 況〉

12. 私の近況／正月と礼装と男の和服・羽犬塚駅でみた壁画・秘窯の里 大川内山  
これは何のパイプかー笠沙町でみた漁村集落の生活の知恵ーぶりを荒縄でぶらさげて  
正月を迎えた

### 〈本・BOOKS〉

15. 「高齢時代を住まう」 —— 2025年の住まいへの提言 —— 伊藤明子・園田真理子 共著
16. 「高齢者にやさしい商品開発」 —— 使いやすいモノとサービス50のヒント —— 服部万里子 著

## 田舎暮らし希望者の受け入れで、多くのファンを次世代まで定着させられるか

——「田舎暮らしフォーラム」に参加して思ったこと——

先日、都会の人の田舎暮らしをサポートするという目的で「田舎暮らしフォーラム」という集まりが開催されたので行ってみた。このフォーラムは「田舎暮らしネットワーク」という福岡県筑紫野市に活動の拠点を置く集まりで、「田舎暮らし大募集・九州編」という田舎への移住希望者のための地域情報誌も発刊している。近年は都会の生活を止めて、田舎でのんびり過ごしたいという人が増えているようで、これまでになく田舎で生活する人が増えているといわれる。

〈九州中の300の過疎市町村に手紙を出したら、70箇所返事が来て、うち35箇所現地調査して場所を絞る〉

フォーラムでは実際に都会から出て、田舎暮らしをうまくやっている4人の方が、苦労話や田舎での現金の稼ぎ方、田舎暮らしの心構えなどについて1人ずつ講演した。中には「田舎暮らしだから過疎地でないといかんといい、九州中の300の過疎地の町村に田舎暮らしの情報（住居や職場はあるかなど）を教えてくださいと手紙を書いたら、70町村から返事が来て、最終的に35町村を現地調査して今の場所に決めた」ということを話す人もいた。

今時、300の候補地があって35ヶ所を現地調査して選べるような幅広い住まいの選択肢はそうないのではなからうか。もっとも、田舎暮らしをしたいという動機が明確だったからこそ、それだけ多くの候補地から選別できたのだと思う。見方を変えれば、田舎暮らし希望者にとってターゲットとなる対象範囲

は九州全域であって、条件さえ合えばどこへでも、という感じでもあった。最終的な場所の選定には、①食べ物が新鮮、②水が良い、③地域社会にとけ込めそうか、などがポイントになったと説明があった。

フォーラムのはじめに「本気で田舎に居住を考えている方は拳手を」という呼びかけがあって、参加していた約150人の過半数がこれに応じた。前日、長崎市で同じ質問をしたら約60人の参加者のうち3~4人しか本気の拳手がなかったそうだ。それだけ福岡市が都市化しているということか。それとも長崎はまだ変に都市化してしまっていないということか。

〈超高齢過疎型の鹿児島県笠沙町は定住促進条例で27人の受け入れに成功〉

私が田舎暮らしというものにも興味をもったいきさつは、鹿児島県の笠沙町で高齢者の調査をしているとき「後継者定住促進条例」という耳慣れない施策をやっていると聞いてからだ。3方を東シナ海に囲まれた同町は人口約3千人、老齢人口比率35%以上という超高齢過疎地であった。平地がほとんどなく海が山に迫っている地形のため、集落は雛壇状になっていてそこに家が並んでいる。産業は漁業が盛んであるが、地形的な条件から漁業以外の産業が育たない状況が続いている。働く場の少なさゆえに若者は中学や高校を卒業すると同時に都会に出ていってしまう。そんなところだった。

しかし、それでも笠沙町の定住促進条例はそれなりの成果をあげているようで、これまで27名の45才

以下の人が都会からのIターン、Uターンで定住するようになった。魚好きの人には申し分ない環境であること、そして高齢者が多いためか町全体がセカセカしておらず、このリズムが生活に合って良かったのではないかと役場の企画担当者が語っていた。

〈自治体と地域社会の思惑と、新規居住者の意識の違いが軋轢になることも〉

近年、全国の過疎地で取り組まれている定住方策は、自治体が定住候補者に優遇を与えることで、引き寄せようとしている（定住奨励金や引越し代を支給したり、場合によっては漁船や牛などをプレゼントするなど）。これは一定の効果を生んだものの問題も含んでおり、自治体の熱の入れ方はややもすれば、とりあえず人口が増えるのであれば構わないというふうな地域社会には映るケースも多いようだ。

次頁に挙げたのは九州の中で人口定住促進の施策をとっている町村の例であるが、どこも40代以下の人材で、地域おこしを担うような「若くて地域の役に立つ定住者」を求めている。

#### 【田舎暮らしネットワークとは……】

私たち「田舎ぐらしネットワーク」は、現在主に九州を拠点として、田舎暮らしや地域おこしをテーマに、〈実践も含め〉活動しているメンバーの集まりです。それぞれが都会生活を経験し、その非人間性を感じとってきた体験から各様に田舎（特に過疎地）と田舎暮らしの可能性に着目、何らかのプランを実行しようという点で一致し、誕生したのが「田舎暮らしネットワーク」です。

「田舎暮らし大募集」表紙より抜粋

地域社会の生え抜きの若者が地域の魅力がないという理由でよそに出て行っている状況の中で、外部の人に町を活性化し魅力を作ってくれるよう期待するのはとても大変なことだろう。

こうした積極的な定住促進は受け入れ側の期待の高さを示すが、一方の新規居住者側が地域社会の一員であるという自覚が伴っていない場合には、双方の間に不満や軋轢が出てくるケースも多いという。

〈都会暮らしの中高年の田舎ぐらし希望者を受け入れて、ファンを増やす方策もあっていいのでは〉

フォーラムが始まる前、私は会場に着いたのが3番目だったので、後から入ってくる参加者の顔を見て、男女別にこちらで勝手に年齢を推測して「正」の字で集計していた。途中からどっと人が押し寄せてきたので諦めたが、7割前後が50代以上の中高年の方と思われた。メモをとりながら真剣に講演に聞き入ったり質問したりするのもこの世代だったようだ。

今回、田舎暮らしフォーラムに参加して感じたのは、50代以上の田舎暮らし希望者は定年後の「居住」の場、つまり、都会の生活では満たされることがなかったであろう、自然とやすらぎを享受できる居住空間を手に入れる手段として、田舎暮らしを考えているのではないかということだ。

50代以上の戦前生まれの世代というと、むかしの田舎の農村というものの原風景を大体頭の中にイメージできる人が多いのではなからうか。あと10年位すれば、仕事を引退して好きなことをやれる年代に入ることになる。そうした人が仕事を引退した後に田舎に居を構えて、晴耕雨読で畑仕事や釣りなどしながらのんびり暮らしたいという思いは非常に強いのではないかと思われる。これは、若者の定住を進め、地域活性化を図りたい地域社会のニーズと相反

## 九州における定住促進施策の例

市町村名	支援対象と支援の内容
鹿児島県 笠沙町	<ul style="list-style-type: none"> <li>○10年以上居住する意志のある1ターン・Uターン者で、15～45歳の就業者が対象</li> <li>○定住しようとする世帯主に50万円、配偶者以外の世帯員一人につき30万円支給</li> <li>○借家の家賃の半分を助成、世帯主が町外へ通勤する場合は月額1万円までの通勤費を援助</li> <li>○結婚したら20万円交付、第三子以上の子どもの出生の場合は一人につき30万円の祝い金を交付</li> </ul>
鹿児島県 日吉町	<ul style="list-style-type: none"> <li>○45歳位までの同居する親族のある人で、宅地を借りてから1年以内に住宅建設に着手することが条件</li> <li>○町外からの移住者に、宅地を1カ月3.3㎡当たり100円で貸し付け</li> <li>○1区画約80坪で20年の貸し付け期間。20年住み続けければ無償で移住者のものになる</li> </ul>
大分県 清川村	<ul style="list-style-type: none"> <li>○農業を始めると50万円支給、無利子で200万円の融資</li> <li>○35歳以下の定住者に20万円支給</li> </ul>

するものになるかもしれない。しかし、最近の田舎暮らしのニーズはこうした中高年の世代から多く出ているようにも思えた。

この際、並々ならぬ決意をもって過疎地に飛び込み「地域の役に立つことをする」ことを条件に受け入れる田舎暮らしだけでなく、人の行き来や風通しを良くすることで、住む人にとっても受け入れる人にとっても地域活性化、心の活性化になるような方策は何かないだろうか。

親が都会を離れて田舎に居住するようになり、その子供たちがたまに都会から遊びに来たり、様子を見に来たりするようになれば、家族単位としては「田舎」を通じて、親子間の交流やつながりを深めることができる。また、地域社会としては定住や目に見える形での地域活性化とまではいかないまでも、都会育ちの子供たちが年に何回か田舎に足を運んできて、やがて地域社会との関わりをもつようになり、そ

の土地のファンになってくれれば、いずれは地域活性化につながるのではないと思われる。

例えば、都会で過ごしてきた親と子供が「田舎」で交流することを通して、子・孫のリゾート地＝親の家とならないだろうか。すなわち、都市2世たちが望みえなくなっている盆と正月の帰省地（日本のリゾート休暇地）として、年に10回ぐらいの盆・正月休暇が生かされるような状況をつくりたい。

（わが国では、これまで無理のない田舎との関わりがなかなかできなかった）

これまで、わが国の都市生活者と田舎の関わりは、お盆と暮れに帰省するところがある人以外は、門戸があまりなかった。それに近年は都市の周辺部が全てベッドタウンになる一方で、里山がものすごい勢いで消滅していった、今では国土保全上の問題にもなっている。今時、純日本風の農村の風景に囲まれるなど、過疎地でも体験できないような贅沢になってしまったようだ。

しかし、田舎との関わり的手段としては、旅行サービス業では、近年ようやくルーラルツーリズムの商品価値が見直されている段階で、これまで田舎と都市の関わりなど商売の対象にされていなかった。また別荘地を持つことは、ある意味では田舎との関わりをもつ手段として挙げられるが、わが国の別荘地は大体地域社会と切り離された分譲地であり「自然に近い」ただそれだけの場所になっているような気がする。近年流行のオートキャンプ場も似たようなものかもしれない。一方、田舎に深く関わりたい人には定住という選択肢があるが、本気で田舎と向き合うことが要求され、地域社会にどっぷり馴染みからやり直すストイックさが必要なようだ。

わが国における田舎との関わりは、このように自

然環境に近づきだけの関わりか、どっぷりつかると関わりかの2者択一の選択肢しかなかった感が強い。

今後はもう少し中間領域的なもの、例えば年金をベースにしながら畑作業や釣りなどをして生活し、気が向いたら都会の人を呼べるような、自分のペースで暮らせる田舎暮らしの門戸ができれば良いのと思う。そういう田舎暮らしならやってみたいという人は、中高年といわず案外多いのではなかろうか。

本当の田舎の魅力は、都市と田舎の生活者がお互いに「田舎らしさ」を認め、無理のない交流ができてはじめて生まれる条件が揃うのではないかと思う。

〈求められるストック活用型の住居と生活基盤の整備、収入は個人の創意工夫で〉

こうした田舎暮らしで、都市から田舎に移り住みたいという人が悩むのは、収入と住居スペースであるといわれる。収入については先のフォーラムでは「何をやっていっても食べていけない、ただし貯金はできない」そうだ。これだけは、個人の創意工夫と価値観の力点によって豊かにも貧しくもなるという。

また、地方の山間部などでは、高齢者が居住している家が都会への転出などに伴って、簡単に放棄されてしまう光景がよくみられ、いかにも残念である。こうした人の住まなくなった家を活用したり、廃材を使って家を建てたりするのはストックの活用という点で非常に有効である。若い世代にも受け入れられるためには下水などのシステム、交通の利便性の向上が必要であるが、検討してみたい方策ではある。

一方、田舎の魅力は、例えば地域の漁師が魚を釣り上げる見事な手さばきであったり、地域の伝統的な祭りであったり、農産物の知識を教えてくれる高齢者の存在であったり、いわゆる地域社会の生活の「知恵の年輪」のような部分と、自然資源や恵まれた

環境など目に見える部分の両方ということになる。このような田舎の魅力を生かし、親と子供と孫の3世代間のつながり、地域社会と外部の来訪者とのつながりを強めて、地域内の活力を強めるような方策を考えてみたいものである。

「九州中の300町村に応募して35箇所現地調査し、この中から1箇所を選んだ」という言葉に表れるように、今後は九州全域にある過疎地のうち、住みよい地域にはそれだけ都会から人が引き寄せられる可能性は高い。その意味では田舎の魅力が見えるような地域づくりを目指すところには、3世代にわたるファンをつくれる可能性は高いと思う。

(尾崎正利・糸乗貞喜)

#### 地域計画のための一知半解辞典①

### 若者定着数・率＝地域づくりの最重要課題である“継続性”を図る指標

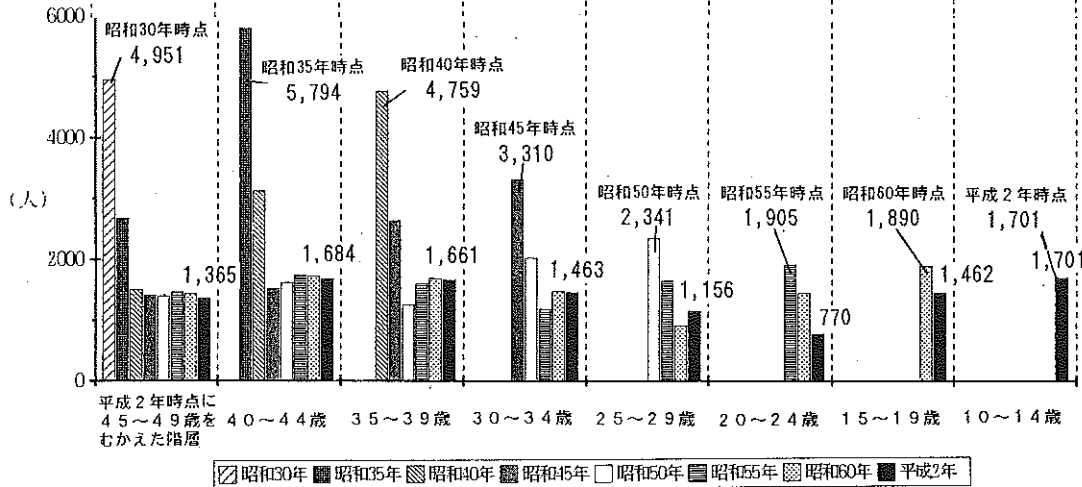
地域づくりの原点は、その地域が途切れてしまわないで“続く”ということである。つまり“継続は力なり”はここでも言える原則である。それも安定して続くということが望ましい。それを前提として、三段論法風に理屈を並べてみると次のようになる。

- ①安定して続くためには安定した“後継ぎ”が必要だ
  - ②5歳階層別人口でいうと、出生率に関係なく、25～29歳層くらいで一定の人数がその地域で安定して暮らし始めているようにしたい
  - ③そのためには、通勤でも何でもよいから、その地域で一定数の雇用先が必要だ
- このように考えながら次表の説明を試みる。

鹿児島県 O市の人口の定着数・率

単位：人、%

	昭和 16～20年生	昭和 21～25年生	昭和 26～30年生	昭和 31～35年生	昭和 36～40年生	昭和 41～45年生	昭和 46～50年生	昭和 51～55年生
10～14 歳	4,951 100%	5,794 100%	4,759 100%	3,310 100%	2,341 100%	1,905 100%	1,890 100%	1,701 100%
	昭和30年	昭和35年	昭和40年	昭和45年	昭和50年	昭和55年	昭和60年	平成2年
15～19 歳	2,661 54%	3,116 54%	2,626 55%	2,016 61%	1,647 70%	1,442 76%	1,462 77%	
	昭和35年	昭和40年	昭和45年	昭和50年	昭和55年	昭和60年	平成2年	
20～24 歳	1,499 30%	1,512 26%	1,246 26%	1,182 36%	907 39%	770 40%		
	昭和40年	昭和45年	昭和50年	昭和55年	昭和60年	平成2年		
25～29 歳	1,396 28%	1,613 28%	1,595 34%	1,468 44%	1,156 49%			
	昭和45年	昭和50年	昭和55年	昭和60年	平成2年			
30～34 歳	1,391 28%	1,735 30%	1,682 35%	1,463 44%				
	昭和50年	昭和55年	昭和60年	平成2年				
35～39 歳	1,454 29%	1,724 30%	1,661 35%					
	昭和55年	昭和60年	平成2年					
40～44 歳	1,426 29%	1,684 29%						
	昭和60年	平成2年						
45～49 歳	1,365 28%							
	平成2年							



10～14歳層をスタートにしたのは、それまではあまり移動しないので省いたのである。これをみると、「初等教育期（10～14歳）から高校・大学に移るにしたがって急減するが、大学卒業後Uターンして少し増加し、それ以後はそれほど増減しない」という法則性がうかがえる。この都市の平成2年の各5歳階層グループの人数は1,365、1,684、1,661、1,463人となっている。

この都市の各グループごとの定着数は、1,450～1,650人くらいと考えられる。つまり5年ごとの平均でみると、その程度の人数をこの土地にとどめるキャパシティをもった都市だとみることができる。

ところが、平成2年の25～29歳層は1,156人と大幅に減っている。ひょっとするとこの年代から地域容量が減ってしまっているのかもしれない。次の20～24歳グループは770人しかいない。1,500人定着の地域づくりを目指すなら、Uターンによってか、あるいは新規の転入によってか、700人余の人を補充しなければならない。つまり、700人余の若者が魅力を感じる職場を、この街か、通勤可能なところでつくり、この街に住んでもらわなければならない。

しかし、この表の数字をみていただければ分かるように、極めて難しそうである。念のため10歳以下の人口の数字も書かれているが、0～4歳グループは生まれた段階で1,314人しかいない。仮に都市政策の基礎としての人口目標を「5歳グループ当たり1,500人」ということに置くなら、大学卒業後全員Uターンするだけでなく、誰かを連れて帰ってきてもらわねばならない。

25～29歳層以後の数字をみると、各グループごとの定着目標を1,000人くらいにみた地域計画を考えねばならないように思える。

現在（平成2年）この都市は25,700人であるが、仮に1,000人ベースになった時の人口を試算すると  
 $1,000 \times 16^{※1} = 16,000$ 人

※1) 16という数字は①0～4歳、②5～9歳……

⑬70～74歳、⑭75～79歳とすると、16グループとなるので概数として乗算してみた

この試算では大幅な人口減となるが、各グループ当たり1,500人だと総人口は24,000人となるから、現在とあまり変わらない。

〈解題〉この方法は昭和44年頃、隠岐島の仕事をさせていただいたとき、安定した地域づくりという考えから思いついたものである。数年経ってからこの表の形になった。実に幼稚な方法であるが、分かりやすいので重宝している。

リゾート狂いの時期、ある町で無謀な計画を国・県などの役所から押しつけられようとしたときも、労働力がないのでサービス業は成り立たないという説明に使った。しかし、当時のバブルリゾートは不動産業としてしか考えられておらず、コンドミニアムを売ることが目的だったので、真面目に説明すると「ワカッテイナイ」とバカ扱いされた。分かっているのではなく、不動産業だけで売り逃げするようなリゾートを持ち込まれるのは困ると思っていたのである。

【一知半解】……なまかじりの知識、教えたくてむずむずする程度の知識  
 （糸乗貞喜）

## グリーン・ツーリズムを考える

—— 地域ゼミから ——

今年第一回目の地域ゼミは、九州大学横川先生による「グリーン・ツーリズムを考える」でした。

〈グリーン・ツーリズムとは〉

「グリーン・ツーリズム」とは、ひとことで言うと「都市と農村の交流の産業化」であり、農村と都市が対等に付き合うという状況をつくるためには、「農村のもてなし・サービスの産業化」が必要であると指摘されました。これをいくつかの視点から次のような話がありました。

- ・都市と農村の交流により、集落・地域の住民の交流が進み、コミュニティが再生される、その結果自分とは何かを表現することになり、地域・住民のアイデンティティー形成につながる
- ・食料の供給という役割から、自然空間の保全、さらに地域文化の伝承へと農村の役割が拡大している
- ・ポスト工業化社会の新しい産業の創出の一翼を担う
- ・農家の所得源の拡大としてサービス業収入が獲得される
- ・農業の付加価値形成のきっかけとなり、多品目少量生産、小規模投資の労働集約型、「人柄・土地柄を通して感動を売る地場産業（農村観光）」となる
- ・高齢者、女性の起業化のきっかけとなり、生きがいづくりにつながる

この話の後、参加者を含めて、都市と農村との交流の経験、農村での滞在経験などを通して、これからグリーンツーリズムを展開していくにあたっての

ポイントとなると思われる議論がありましたので、紹介します。

〈マーケットの確保〉

農村の人々によるもてなし・サービスの産業化のためには、市場（ここでは都市の人々）が何を求めているのかを掴まないと長続きしない。結局はリピーター・ファンをどれだけ確保できるかというのが事業継続の鍵となる。そのためには、不特定多数の都市の人々を対象とする前に、住民の地縁・血縁を生かした人的ネットワークで「縁」を拡大してことが大切である。

〈知的好奇心に応えるもの〉

現在行われている多くの交流の中で、都市からやってくる人達が、何を求めているのかということをも本当に分かってやっているのかどうかには疑問が多い。農村の伝統文化、食文化（とくに食に関しては期待が大きいのでは）を限りなく本物に近い形で体験できるようにすべきであろう。つまりは来村者の知的好奇心を満足させるようなサービスを整えないと、ファンも次第に減っていくであろう。

〈光る素材を大切に〉

この知的好奇心を満足させるには、地元にある素材、他の地域に無い「光る素材」を活用することが大切であり、どこにでもあるようなものには感動しない。ここに来ないと経験できないコトをサービスすることが求められる。

〈自慢したくなるコトをおこすのがポイント〉

こういう交流を続けるためには、来村する人が他の人に自慢したくなるようなサービスを与えると同時に、提供する側の地元の人々の気分も良くなることが大切である。これによって自発的に村の資源を美しくする活動のきっかけや、途絶えていた伝承文化

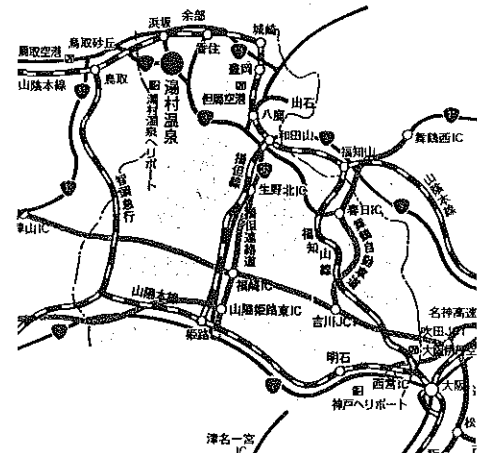


の復活につながり、これが地域の「光る素材」を発掘することや活用することになっていくと思われる。  
(山辺真一)

大はやりで、積立金もできている  
「リフレッシュパークゆむら」  
—— 自然と資源を活かしたまちづくり ——

兵庫県但馬地域にある温泉町は「湯村温泉」と「夢千代日記」で有名なところだ。2月13日、兵庫県温泉町の中村幸夫農林課長が来福されたのを機に、地域ゼミ特例会を開きお話をうかがった。以下に要点を整理した。

- 〈リフレッシュパークゆむらができるまで〉
- ・昭和50年頃の湯村温泉は、全国によくあるピンク系主流の温泉街で、お客もそこそこ順調に来ていたが、世の中の流れも変わってきて、昭和57年頃、危機感を持っていた職員が立ち上がった
- ・「自然と資源を活かしたまちづくり」をテーマに掲げ、町の持っている天賦の資源「温泉」「山」「但馬牛」の活用方策を考えた
- ・昭和30年ピークで人口約13千人、以降徐々に減少し、昭和55年国勢調査では8千7百人となっていた。これ以上の人口減少を防ぎ、若者定住のための雇用創出、観光開発を行った（その結果、平成2年人口8千人に留まった）
- ・昭和59年、「リフレッシュパークゆむら」基本計画を策定し、「森林浴」「温泉浴」「日光浴」の3浴を満たすレクリエーション型施設づくりを行った〈プール・レストラン、水着で入る露天風呂〉
- ・施設の内容は、



- ①社会福祉施設等施設整備事業（厚生省）による「リフレッシュ館」（温泉多重浴、休憩施設）
  - ②社会体育施設整備事業（文部省）による「町民温泉プール」
  - ③新林業構造改善事業（農林省）による「露天風呂」「森林公園」「総合案内施設」
- など、所管の違う公共事業によって整備されている。露天風呂は、混浴で水着着用で入浴する。女性にはすぐに受け入れられたが、男性は水着を着るのは嫌らしく、裸で入ったものの女性がいるので恥ずかしく、あわてて水着を借りに来ることがたびたびあるとか
- 〈利用者は年間10万人を超え、初年度から黒字、数年後には積立金も徐々に〉
- ・第3セクターの株式会社「温泉町夢公社」を設立し、町でつくった施設の管理・運営を行っている
  - ・この夢公社の直営である但馬牛のステーキレストラン「楓」は、客単価を比較的安くして（1,500～5,000円）、年間1億円を売上げている

- ・施設の利用は、初年度から当初予定していた6万人を大幅に上回り、平成5年度には14万人の利用となっている。利用者は、老若男女関係なく、関西方面を中心に集まってくる。町民の利用は約1割で、スイミングスクールの子供が多い
  - ・入場料1,100円でレストラン、物販を含め全体で年間3億円の売上となっている。平成7年度は、阪神大震災により利用者は2割ぐらい減ったが、あと2~3年で町負担の償還は完了する予定である
- 温泉町は、山間部で都心から3時間かかる町だが、10万人を超える流入人口が町の活力となっているようだ。また、施設の整備により20人以上の若者が定住しており、良いものをつくれれば、2次的な副産物もできるということだった。

最後に、中村さんから「今度は、ヨーロッパでよくみられるような、営利を目的としない健康のための温泉活用、楽園づくりをやりたい」という夢を聞かせていただいた。 (歌丸星子)

もう少し優しさが欲しかった歩道橋  
横断歩道まで無くしてしまったのに

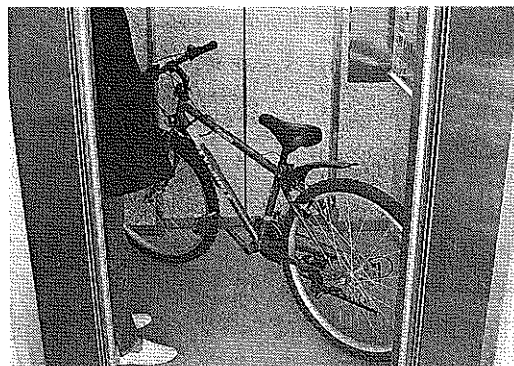
福岡市東区のシンボルの一つでもある香椎宮の参道へ向かう道路と国道3号線との交差点に、昨年の秋頃エレベーター付きの歩道橋が完成した。

私はこの近くに住んでおり、時々この交差点の角のスーパーマーケットに出かけることがあり、この歩道橋が出来上がるのを楽しみにしていた。

しかし、実際に完成した歩道橋を使用してみると、自転車利用が多いにもかかわらず、自転車利用者には使いづらいものとなっている。



誕生したばかりの歩道橋



自転車もななめにすればなんとか入るが……

元々、この歩道橋設置の目的は、朝夕の恒常的な渋滞を招いていた交差点の車の流れを良くするもので、そのために横断歩道をなくし、自動車以外は全て道路の上を通るようにしている。

どのようにこの歩道橋が使いづらいかというと、①エレベーターが各4隅に設置されているのはいいのだが、規格が小さく、自転車は前輪を直角にしてしか入れない。自転車が入ると人はあと1~2人ぐらいしか入れないし、車椅子も1台入るとほとんどいっぱいになってしまう。

- ②夜間は防犯のため、PM11時以降はエレベーターをストップしてしまい、階段を利用するか、横断歩道がある交差点まで遠回りするしかない。
- ③自転車用としてスロープが階段と並列して設けられてはいるが、自転車を押して歩道橋まで上がるのは負担がかかる。しかし、エレベーターの前に人が何人か立っていると、自転車の方が遠慮して、しかたなくスロープを利用しているようだ。あるいは、はじめから歩道橋はあきらめ、遠回りして横断歩道があるところまで行っている人がいるとのことであった。

国道を横断する人の流れをみてみると、角のスーパーマーケットなどへの買い物を目的とした利用者が多く、特に自転車利用の奥さん方が多いのにもかかわらず、このようなニーズを無視して自転車が十分入らないエレベーターを設置していることに問題があるようだ。もう一ランク規模の大きいエレベーターを設置していれば、自転車も車椅子利用者も利用しやすい歩道橋になったのではないかと思う。

利用者の一人として、お金をかけた歩道橋であるだけに、エレベータのランクを少し落としたために使い勝手が悪くなっているのは残念である。

(山田龍雄)

### 歴史が埋もれていたまちと、受継いできたまち

—— 岐阜県大和町、郡上八幡 ——

名古屋から北の高山方面に向かって、長良川沿いに車で2時間くらい行ったところに大和町やまとちょうはある。冬にはスキー客が往来するような町だ。国道からひとつ入ったその奥に「古今伝授の里」がある。ちなみ



丸太を利用したテーブル

に“こきんでんじゆ”と読む。簡単に説明すると、東氏が鎌倉時代から室町時代に当地を治め、9代東常縁とうのつねゆかりが連歌師宗祇そうぎに古今和歌集の奥義を伝授し、それが代々伝えられた、という史実に由来したものである。つまり「和歌」という文化を資源としたまちづくりである。

最初に案内されたのはレストラン「ももちどり」。名前は古今集に出てくる鳥の名前にちなんでいるが、漢字で書くと「百千鳥」で、たくさんの方が来るようにとの願いも込められている。

レストランの真ん中には直径1mはある丸太が横たわっていて、向かい合って14人が座れるテーブルとして使われていた。用意されたメニューはフランス料理で、なんでここでフランス料理？、という意見と賛否両論だが、地元の人（若い女性から高齢の人まで）には好評のようだ。

施設としてはその他に、資料館としての「東氏記念館」、長さ36mにわたる絵巻を壁一面に描いた「和歌文学館」、売店「よぶこどり」、茶店「いなおほせどり」等が並び、その向かいには昭和54年の闘場整備で見発された名勝東氏館跡庭園、篠脇城跡等があ

り、これらを含めた一帯を「古今伝授の里フィールドミュージアム」（日本語で言えば野外博物館）としている。

まだ施設ができたばかりで、まちおこしとしてはこれからという感じではあるが、例えば中学校では短歌の授業なども取り入れ、全国の短歌大会で学校賞を受賞する等の実績も作っていて、今後の住民への浸透や、子供たちのふるさとアイデンティティの形成などを予感させる。

次の日は、隣の郡上八幡<sup>ぐじょうはちまん</sup>を観光がてら見に行くことになった。郡上八幡は郡上郡八幡町のことであるが、ここは夜を徹して踊る「郡上踊り」で全国的にも有名である。

まず「郡上八幡博覧館」で歴史や踊りなどについて、パネル展示やビデオなどでひととおり勉強。この中に、大和町の古今伝授について紹介しているコーナーもあり、古今伝授が広域的にも地元文化として認識されていることが窺える。

博覧館のパンフレットには、「博覧館が薦める郡上八幡散策地図」が載っていて、これを片手に我々は散策に出かけた。地図は手書きだが、きちんと書き込まれていて、親しみやすく分かりやすい。

ここには大正時代の街並みや、その間の道路脇を流れる水路がある。この水路は、野菜を洗うなど今でも使われているそうだが（ただし泥を落とす程度で、そのあと水道で洗い直すらしい）。また古い民家を利用した民芸館と、新しく建てた工芸館が共存していたりもする。

郡上八幡は、昔から観光地として歴史資源を受け継いできている。まちの人もそのことを十分意識しているようだ。

大和町と八幡町は、隣同士で同じように歴史にま

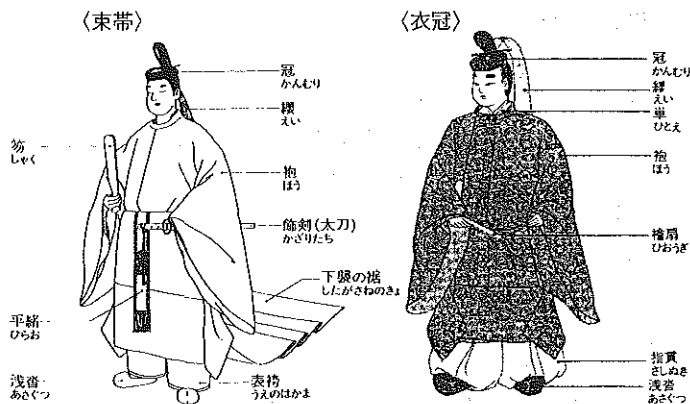
ちづくりの資源を求めているが、八幡町の人とは伝統的に歴史や文化と向き合ってきたのに対し、大和町の人（まちづくりを先導した一部の人を除く）はようやく歴史と向かい合ったところといえる。正直言って、見て回って面白かったのは郡上八幡の方だった。つまらないものでも何だか価値があるように見える、そんな域に達するには、やはり時間は必要なのだろうと思った。（伊藤 聡）

## 私の近況

### 正月と礼装と男の和服

毎年、正月に違和感を感じる風景がある。天皇陛下が、各国の大公使の正月の挨拶をうけられるニュースの1ショットである。前々からこの風景を気にしていない思いで見えていた。その理由は、天皇陛下の洋風な服装と比べて、各国の大公使夫妻の民俗衣装の方がきれいで貫禄があり、陛下の服装があまりにも見劣りがするからである。なんとか羽織袴などの日本文化を外国の人にも誇れるような服装ができないものかと考え続けてきた。羽織袴が武家装束だということなら東帯でも衣冠でもよい。正月の挨拶をうけるということは（本当は謁見するというのかもしれない）儀式であるが、日本の礼装は動きにくいから活動的な洋服にするというような話は困る。儀式であるから、動きにくくても見劣りしないようにしてもらわねば困る。

まあしかし、例年なら自分で思うだけで、とりたてて言うこともなかった。今年は、大相撲の中日の、いわゆる天覧相撲という日のテレビを見てしまった。このときの、体格のいい親方衆が全員羽織袴で、天



(平凡社「世界大百科事典」より)

皇陛下を出迎えるところの風景は、また面白くなかった。もし羽織袴がまずければ、また束帯が面倒ならば、一層のことスポーティなカジュアルウェアでいいのではないかと思った。

これも普通なら、とりたてて文章にするほどもなく忘れてしまうところであるが、文章にまで書く気になったのは、日経新聞の「私の履歴書」に梅棹先生の文章がのったからでもある。

そういうこともあってか、先日、書店で「美意識と神様」(中公文庫)という風変わりな梅棹先生の本を手にとってみたのが運の尽きである。

その中に「キモノ外交の是非」という1961年に書かれた文章があり、その中で当時池田首相と小坂外相が日本大使館主催のパーティで「紋付・羽織・袴であらわれた」ことについてのエッセイが載っている。ここでは日本文化を大切にする視点で述べられている。この文章の中には「カンヌ映画祭で、女優の吉村真理さんが、黄八丈のキモノを着て出席して、同席した政治家に『目から火のでるくらい』しかられた」という話も出ている。今はどうかわからない

が、当時は、少なくとも政治家の世界では欧米ソックリにすることが最大の価値で、紋付・羽織・袴などは村会議員の衣装だというように、ふるくさい、はじさらしだというような雰囲気があったのである。

立読みでもいいから(当然私は買ったのであるが)見ていただきたい。一言書きさえすると、私は吉村真理さんのセンスの方を支援しているのである。

この本には「尺貫法とメートル法」という文章が載っていて、これも日本文化をどう考えるかという点で共感するが、それはさておき、その末尾に永六輔の「天着連」=「天皇に着物をお召しただこう市民連合」という運動のことも出ている。孫引きで申し訳ないが、一応紹介しておく。

〈追記〉……正月の天皇陛下に関するニュース報道で、もうひとつ気になっていることがある。敬語の使い方である。天皇や天皇制を倒そうという意図があるのかもしれないが、公器としての新聞やテレビ報道なら、日本の象徴に対して、日本語らしい敬語を使うべきである。日本文化を大切にする観点で面白くないのである。(糸乗貞喜)

### 羽犬塚駅でみた壁画

筑後市を通っているJR鹿児島本線の玄関口となっているのが、羽犬塚駅である。

最近、当駅を利用した人はお気づきのことと思うが、駅ホーム改札口の向かい側の壁面(隣に建っている倉庫の壁面を利用している)に縦6m横10mの巨大な、小学生が描いたと思われる絵が3点飾られている。ふとこれを見つけて、なかなか良い気分になった。変な民間の広告より、よっぽど気の利いた駅の広告になっているし、または筑後市のイメージアップにもなっているようである。

これは、駅の真向かいで長年、小麦製粉の操業を



大きく拡大された子供たちの絵

してこられた石橋工業㈱の社長さんが、倉庫の建替えに伴い、単に白い壁面を駅の利用者に見せるより、筑後市のイメージをアピールできるものを出したいと思いついたそうである。まず、教育委員会に働きかけ、小学生から「太陽、麦、豊かな緑」というテーマで絵を募集。審査は筑後市内の画家の方、小学校の図画の先生、倉庫の建築士、筑後JAの方などを入れた審査委員で行ったそうである。

実際に画用紙に描かれた絵の拡大方法を、担当した会社（広告看板等の専門会社）の技術の方に聞いてみると、まずコンピューターで絵を読みとり、50分割した絵を概ね90cm×120cmの樹脂系のプリントに拡大印刷し、現場で張り合わせたそうである。さらに保護用のスプレーで塗膜しているとのことであった。ちなみに、制作費用は㎡当たり約2～3万円かかり、ほとんど原価に近い値段、一枚当たり120万円程度だったということである。今後も2～3年ごとに新たに小学生から絵を募集していく予定であるとのことであった。2～3年後には、どんな絵が壁面を飾ることになるのか楽しみである。（山田龍雄）

### 秘窯の里 大川内山

延宝3年（1675年）、佐賀の鍋島藩は、焼き物の秘法が外に漏れるのを防ぐために、藩窯を有田から移しました。それが、伊万里市にある大川内山です。

有田から車で約30分、山水画に描かれているような険しい岩山に囲まれた山間に、斜面に沿って30数軒の窯元が立ち並んでいます。

年明けの雪が降る寒い日にちょっと立ち寄ってみました。窯元の店舗はどこも明るく、来客者が入りやすい雰囲気をつくっていました。

青磁の店の看板を見つけ、中に入ってみると、4畳半くらいの狭い部屋に何千円から何百万円の青磁がずらりと並べられています。そのすみに、青磁の製作過程が並べてあり、焼き方の違いなどが手にとってわかるように展示されていました。ちょっとした博物館のようだと興味深く見ていると、店の方が出てこられ、青磁の歴史やひび（貫入）の入り方の説明をしてくれました。何も買わなかったものの、物知りになったような、いい気分をもらって店を出ました。

別の店で同行者がお皿を購入したら、サービスとして、今年の初窯で焼いたという湯呑み茶碗をいただき、さらにいい気分になって大川内山をあとにしました。（歌丸星子）

### これは何のパイプか。笠沙町でみた生活の知恵

笠沙町は、鹿児島県は薩摩半島の西南端に位置し、北西に舌先状に突き出た細長い半島となっており、南、西、北は東シナ海に面している。そのなかで、景観整備を行っている「大当地区」という漁村集落に行ってみた。

当地区は斜面地を切り開き、雛壇状に住宅が建ち並んでおり、その斜面地を背景に段状に重なった屋



答：このパイプは各家庭のトイレから出ている、その先端はバキュームカーのホースと接合できるようになっている

根の連なりは、このような地形でしか生み出せ得ない美しいシルエットを創り出している。路地には石畳が敷かれ、また雨水用の側溝も暗渠に切り替えられるなどの景観整備が行われていた。

この集落の路地を見て歩いているときに、ふと眼に止まったのが、各家々から出ているパイプであるが、先端は蓋がされている。これは何のためのパイプなのか想像して下さい。(山田龍雄)

#### ■ぶりを荒縄でぶら下げて正月を迎えた

博多の正月の魚はぶり。最近は一匹を買って荒縄でしっぽを巻いて吊るし、20日の「骨正月」まで切りとって食べるという博多の昔ながらのお正月を守る家は今時どのくらいあるのだろう。

朝市で、4キロの天然ものを3千円で購入し、締めて血とわたを抜いて尻尾に荒縄をかけて家の北側の軒下に吊しておいた。

山の中腹にあって大陸の風がまともにあたる我家は、外の方が冷蔵庫よりも冷える。塩を利かせて20日の骨正月までもたせようかなと考えていたが、友人が遊びに来る度に得意になって切って食べさせ、自分が食べる分はほとんど無くなってしまった。

デパートなどでは1~2万円で売っていたようだ。季節ものはなぜあんなに高いのか？みんなが買いたいものほど安くすればいいのと思う。(尾崎正利)

## —— 本の紹介 ——

### 「高齢時代を住もう」

2025年の住まいへの提言

伊藤明子・園田真理子共著 建築資料研究社

この本のサブタイトルにある「2025年」とは、我が国の4人に1人が65歳以上の高齢者になるという、まさに超高齢化を迎える年代のことであり、あと約30年後の時代である。高齢社会への様々な対応は「待ったなし」の時代に突入しているといえよう。本書は、超高齢社会を迎えるにあたって単に高齢者住宅の技術的な指南書ではなく、社会性や経済性を捉えた幅広い観点での提言書となっている。例えば「住宅投資のあり方」では、ライフステージの変化を考えた住宅の大きさや間取りを考えておくこと、また、「低成長」時代といわれる昨今では収入の拡大を見込んだ過度な投資は今後難しいことなどを述べている。「住宅コストと介護コスト」との比較の節では、当初から介護しやすい住宅にしておけば、ヘルパーの介護時間が短くて済み、負担費はかなり軽減されることを示している。また、住宅コストにおいては、建設にかかる初期投資のみではなく、建てたあとの維持・修繕費等を含めたトータルコストの視点が必要であることが述べられている。

さらに本書の中で特に印象深く感じた論点としては次のようなものがあげられる。

- ・高齢化の進展しつつある各国の高齢者向け施策を時系列で見ると、高齢化率が10%以下の状況では養護老人ホームなど施設対応型のみだが、15%程度の段階ではシニア住宅などの多くの施策が提案されてくる。さらに15%を超えると在宅対応が充実してくる。
- ・老後の安心のためのシステムは、アメリカ型と北欧型との中間が望ましい。単純な市場型でも社会保障型でもない、その中間あたりにありそうだ。
- ・高齢者自身のモビリティの衰え、在宅サービスの効率性などを考えると、職住近接型のコンパクトなまちづくりを目指すべきである。(山田龍雄)

### 「高齢者にやさしい商品開発」

使いやすいモノとサービス50のヒント

服部万里子 著 日本経済新聞社

私の87才になる祖母は、ガスの炎をかなり大きくして煮炊きしていることがある。時々さりげなく注意するのだが、本人はそんなに火が大きくなっていると気がついていないらしい。ずっと不思議に思っていたのだが、「うらしま太郎」を体験してその疑問はすぐに解けた。高齢者にはガスの青い炎が見えにくいのだ。このように高齢者の身になって考えることはなかなか難しいのだが、その一助となる「うらしま太郎」という高齢者疑似体験セットの開発にも関わってこられた服部さんのことばは、かなり説得力がある。

高齢社会をむかえ、ますます増えるシルバー世代のニーズに対応することが、社会にも企業にも期待される今、本書のように服部さんの実体験から出さ

れた、高齢者のための商品やサービスの改善についてのヒントはとても興味深い。誰もが迎える高齢期を楽しく豊かに暮らすために、皆で知恵を出し合っていくことが大切だろう。(富重慶子)

### 編集後記

◎今号で「よかネット」も20号を迎えました。各号でネットワークのテーマはあまり統一してはいませんでしたが、今回は都市と農村、田舎暮らしなど似通ったテーマとなったのは偶然です。

◎田舎でのんびりというのは、都市の喧騒とは違うという意味であり、田舎暮らしにもそれなりの忙しさ、騒がしさがあるようです。

◎今号から仕事を通じて分かったちょっとおもしろいデータを「一知半解」というコーナーで紹介することにしましたが、次号から全体の趣を少し変えた編集にする予定です。(べ)

よかネット NO.20 1996.3

(編集・発行)

◎九州地域計画研究所

〒810 福岡市中央区天神1-15-1 日之出ビル6F  
TEL 092-731-7671 FAX 092-731-7673

(ネットワーク会社)

◎地域計画建築研究所

本社 京都事務所	TEL 075-221-5132
大阪事務所	TEL 06-942-5732
名古屋事務所	TEL 052-962-1224
東京事務所	TEL 03-3226-9130